

チャンディ・ボロブドゥール

revised 2014-06-05

この単元のねらい: ボロブドゥール寺院の構造と意味を、建築、浮き彫り、仏像の観点から探る。

1. 建築物としてのボロブドゥール

1.1 沿革

- ・ ボロブドゥール。Candi Borobudur<Bara Budur。
- ・ チャンディ: 石造または煉瓦造りの宗教建築遺構
- ・ 中ジャワ州クドゥ盆地。ジョグジャカルタの北西約40km。
- ・ 千原: 790年頃着工。842年チャンディ・プトゥン碑文、860年以降に現在の形に完成。
- ・ Dumarçay: 775年頃-790年頃(第1期)。795年頃-820年頃(第2期)。860年頃(第3期完了)。
- ・ シャイレンドラ王朝
- ・ 842年チャンディ・プトゥン碑文(Candi Petung): Śrī Kahulunnan (皇后陛下)が「kamūlan i bhūmi sambhāra(地・資糧)」という名の祠堂を寄進した。bara budur<bhāra [bhūdhara]
- ・ 1814年、ジャワ副総督ラッフルズ、「再発見」。『ジャワ誌』(1817年)
- ・ 1886年、「隠れた基壇」発見。本来は方形壇5層。
- ・ 1907年、オランダの修復事業開始。
- ・ 1968-1983年、ユネスコの援助による国際修復事業。1991年にユネスコの世界文化遺産登録。
- ・ 現在は公園。ただし、ワイサクの祭日には全国の仏教徒が集まる。

1.2 概要

- ・ 1辺120mの方形基壇。6層の方形壇と3層の円形壇。高さ42m。最上壇に直径16mの鐘型中央仏塔。
- ・ 安山岩の切石(20-30cm)。55,000立方m。
- ・ 仏塔(stūpa)としては特異。遺灰は未確認。祠堂(金堂)、僧院にあらず。
- ・ 東正面。右繞(プラダクシナ)。
- ・ 拱門: カーラとマカラ。
- ・ ムンドゥット(3km)、パオン(1.8km)。ムンドゥット: 釈迦牟尼仏、世自在(右脇侍)、金剛手(左脇侍)。

1.3 構造の意味

- ・ 三界(三界説には問題あり)
欲界(kāmadhātu)、色界(rūpadhātu)、無色界(arūpyadhātu)。問題有り。参考: 三界六趣
- ・ 菩薩の十地(daśabhūmika)
「三乗共の十地」乾慧地、種姓地、八人地、見地、薄地、離欲地、已弁地(以上、声聞) 辟支仏地(縁覚)、菩薩地、仏地。『華嚴経』「十地品」による十地。842年チャンディ・プトゥン碑文(Candi Petung)
- ・ 仏教の教理を発展段階に即して表示する「仏教百科事典」: 初期仏教～部派仏教(前生物語と仏伝)、大乘仏教(華嚴経)の教理を示す浮き彫りと、密教(金剛頂経)の教理を示す仏像群

2. 浮き彫り

- ・ 浮き彫り(relief)、回廊(gallery)、主壁(main wall)、欄楯(balustrade)

	所在	典拠(漢訳仏典)	パネル数
11	第4回廊主壁	普賢菩薩行願讃	72
10	第4回廊欄楯	大方広華嚴經入法界品(善財童子 の55善知識歴訪)	84
9	第3回廊欄楯		88
8	第3回廊主壁		88
7	第2回廊主壁		128
6	第2回廊欄楯	本生譚および比喻經(前生物語)	100
5	第1回廊欄楯下段		128
4	第1回廊欄楯上段		372
3	第1回廊主壁下段		120
2	第1回廊主壁上段	方廣大莊嚴經(仏伝)	120
1	隠れた基壇	分別善惡応報經(因果応報)	160
合計			1460

3. 仏像

- ・ 丸彫り。壁龕(niche)、円壇上の釣鐘形ストゥーパ。印相(mudrā)。

所在地	方位	仏像(推定)	印相	個数
円壇上ストゥーパ		釈迦牟尼仏(Śākyamuni)	転法輪印	72体
第4回廊主壁上の仏龕	四方	毘盧舎那仏(Vairocana)	説法印(vitarka)	64体
現基壇から第3回廊までの 仏龕	東側	阿閼仏(Akṣobhya)	触地印	92体
	南側	宝生仏(Ratnasambhava)	与願印	92体
	西側	阿弥陀仏(Amitābha/Amitāyus)	禅定印	92体
	北側	不空成就仏(Amoghasiddhi)	施無畏印	92体
合計				504体

3.1. 仏像は密教のブツダ観を表象

- ・ 自性法身としての毘盧舎那仏(象徴としての中心仏塔)、自受用法身としての毘盧舎那仏物(円壇上ストゥーパ内の仏像)、他受用法身としての釈迦牟尼仏(第4回廊主壁上の仏龕内の仏像)、変合法身としての四方の仏たち(第3回廊以下の仏龕内の仏像)

4. 密教の勃興とその東漸

- ・ 義浄、南海を往復(671-695)。
- ・ (中期)密教の勃興(7世紀):『大日経』『金剛頂経』の成立。
- ・ 金剛智(Vajrabodhi)は南インドにて龍智より『金剛頂瑜伽経』『毘盧遮那総持陀羅尼』などを学ぶ。菩薩の夢のお告げで師子国へ渡る。さらに中国へ向かうため、波斯の商船に乗り718年頃「仏逝国」に到る。風待ちのため五か月滞在。難破の危地を脱して720年唐に到る。(『貞元新定釈教目録』第14巻)
- ・ 不空(Amoghavajra)は705年南インドに生まれる。708年、「闍婆」にて金剛智と会い、弟子になり、師とともに唐に到る。不空の弟子の恵果の弟子に一人が空海(804-806年在唐)。(同第15巻)

- ・ 奈良東大寺大仏(752)。毘盧遮那仏。『華嚴経』に基づく。752年、聖武天皇、光明皇后が願主、婆羅門僧正菩提遷那(Bodhisena)が大導師となり、僧一千、文武百官が列した開眼供養会を開催。

■参考文献 (☆入門向き)

- 青山亨. 1998. 「ボロボドゥールとプランバナナ」『季刊 文化遺産』5: 14-21.
- . 2014. 「ボロボドゥール」『東南アジアを知るための50章』明石書店, pp.284-290. ☆
- 安藤充. 2011. 「ボロボドゥール」『静と動の仏教』(新アジア仏教史04 スリランカ・東南アジア) 佼成出版社, pp.206-210.
- 千原大五郎. 1975. 『インドネシア社寺建築史』日本放送出版協会.
- Coedès, G. 1968. *The Indianized States of Southeast Asia*. The University Press of Hawaii, East-West Center.
- Casparis, J. G. de. 1956. *Selected Inscriptions from the 7th to the 9th century A.D.* (Prasasti Indonesia II). Bandung.
- Damais, Louis-Charles. 1952. *Études D'Épigraphie Indonésienne III*. BEFEO 46: 1-105.
- Dumarçay, Jacques. 1991. *Borobudur*. (Images of Asia) 2nd ed. Oxford University Press.
- (西村幸夫監修、藤木良明訳. 1996.『ボロボドゥール』学芸出版社)
- 深見純生. 1999. 「ジャワ古代史の再構築—シーマ定立の政治学」『岩波講座世界歴史 6』岩波書店.
- . 2001. 「ジャワの初期王権」『岩波講座東南アジア史 1 原史東南アジア世界』岩波書店, pp. 285-307.
- 布野修司(編). 2003. 『アジア都市建築史』昭和堂.
- Gomez, L. O. (ed.) 1981. *Barabudur: History and Significance of a Buddhist Monument*. Univ. of California.
- Hall, D. G. E. 1981. *A History of South-East Asia*. 4th ed. The Macmillan Press.
- 井尻進. 1989. 『ボロボドゥール』(中公文庫) 中央公論社.
- 石井和子. 1988. 「古ジャワ『サン・ヒアン・カマハーヤーンカン(聖大乘論)』全訳」『伊藤定典先生・渋沢元則先生古希記念論集』東京外国語大学インドネシア・マレーシア語学科研究室, pp.57-99.
- . 1994. 「ジャワの王権」. 『変わる東南アジア史像』所収. 69-89. 山川出版社.
- 伊東照司. 1992. 『ボロボドゥール遺跡めぐり』(とんぼの本) 新潮社. ☆
- 岩本裕. 1981. 「Śailendra王朝とCaṇḍi Borobudur」『東南アジア—歴史と文化—』10. 17-38.
- . 1973. 「インドネシアの仏教」. 『東南アジアの仏教: 伝統と戒律の教え』(アジア仏教史インド編6) 所収. 261-309. 校正出版社.
- . 1973. 「総論—歴史的背景」. 『東南アジアの仏教: 伝統と戒律の教え』所収. アジア仏教史インド編6. 15-64. 校正出版社.
- Krom, N. J. 1931. *Hindoe-Javaansche Geschiedenis*. 2nd. ed. Martinus Nijhoff.
- (有吉巖訳. 1985. 『インドネシア古代史』天理教道友社)
- 松長有慶. 1969. 『密教の歴史』平楽寺書店.
- . 2001. 『密教—インドから日本への伝承』(中公文庫BIBLIO) 中央公論社. ☆
- 松永恵史. 1999. 『インドネシアの密教』法蔵館.
- 溝口史郎. 1994. 『シャカムニの生涯』(丸善ブックス) 丸善. ☆
- 仲田浩三. 1972. 「訶陵国号考」『東南アジア—歴史と文化—』2. 100-121.
- Soekmono, R. 1995. *The Javanese Candi: Function and Meaning*. (Studies in Asian Art and Archaeology 17). E. J. Brill.

ボロブドゥールの仏教を考える (ver. 1.2)

1. 初期仏教

- ・ブッダ (buddha, 仏陀): 悟った人
- ・ムニ (muni, 牟尼): 聖者
- ・アラカン (arhat, 阿羅漢、羅漢): 尊者
- ・ボーディサットヴァ (bodhisattva, 菩薩): 悟りを求める存在 (人)
- ・シッダールタ: カピラヴァストウにあった王国の王子。ゴータマ氏 (うじ)。シャーキャ (釈迦) 族。
「ゴータマ・シッダールタ」「釈迦牟尼」「釈尊」
- ・生誕⇒結婚⇒出家⇒修行⇒成道⇒布教⇒入滅
- ・在家⇒出家、悟り⇒教え (智慧と慈悲、自利利他)
- ・三宝: 仏 (ブッダ)、法 (ダルマ)、僧 (サンガ)
 - ・仏: 生身、法身
 - ・法: 経・律・論 (三論)
 - ・三法印: 諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜
 - ・出家者共同体
- ・言語: 民衆語から文章語へ
 - ・マガダ語⇒サンスクリット語 (シッダールタ) ⇒漢訳、チベット語訳
 - ・マガダ語⇒パーリ語 (シッダッタ) (プラークリット)

2. 部派仏教

- ・第一次分裂 (根本分裂)
ブッダ入滅後100年頃、アショーカ王治世、「十事の非法」をめぐる対立⇒上座部と大衆部
- ・第二次分裂
第一次分裂から100年～300年後の間に、大衆部は9部派、上座部は11部、合計20部派。
- ・上座部からは説一切有部が分派し、有力となる。
- ・ヴァスバンドゥ (Vasubandhu, 世親、4-5世紀)
『阿毘達磨俱舍論』⇒俱舍宗
『唯識三十頌』⇒法相宗
南都六宗: 三論、成実、法相、俱舍、華嚴、律
- ・上座部 (Theravāda)
保守正統、パーリ語を採用、スリランカが拠点⇒12世紀以降、東南アジアに広がる。

3. 大乘仏教 (Mahāyāna)

- ・前1世紀～⇒大乘仏教運動: 多仏、多菩薩⇒部派仏教 (とくに有部) を「小乗仏教 (Hīnayāna)」と批判
- ・1世紀～⇒新しい經典の出現: 『般若経』、『華嚴経』、『法華経』、『無量寿経』 (阿弥陀仏) など
- ・7世紀後半～⇒密教經典の出現『金剛頂経』 (大日如来の説教) など
- ・玄奘の記録 (7世紀): インドでは大乘、部派仏教、バラモン教、ヒンドゥー教が併存
- ・義浄の記録 (7世紀): 東南アジアでは根本説一切有部、正量部、大衆部、上座部、大乘 (スマトラ) が実践
- ・「8世紀の仏教世界»: インド・東南アジア・東アジア
サンスクリット語 (漢訳、蔵訳): 大乘 (+ 密教) + 部派仏教 (有部、正量部)、パーリ語: 部派仏教 (上座部)

4. 参考文献

- 金岡秀友 (編). 1977. 『部派仏教＜シンポジウム仏教＞』校正出版社.
 金岡秀友・柳川啓一 (監修). 1989. 『仏教文化事典』校正出版社.
 奈良康明. 1979. 『仏教史 I インド・東南アジア』(世界宗教史叢書7) 山川出版社.
 奈良康明ほか (編). 2010. 『新アジア仏教史』全15巻 (とくに第4巻・東南アジア) 佼成出版社.

年代	事項
前5世紀頃	ブッダ活躍 (～前383年)
前283年頃	この頃、第2回仏典結集。この頃、根本分裂。
前268年頃	マウリヤ朝のアショーカ王即位。仏教を普及。
前100年頃	部派分裂終わる。大乘仏教運動始まる。
前100年頃	スリランカにアバヤギリヴィハーラ建立
1世紀	初期大乘經典成立 (～250年頃)
67年	後漢に仏教伝来、白馬寺建立。
320年	グプタ朝、成立。サンスクリット語を公用語とする。
415年頃	ブッダゴーサ、スリランカに滞在し『清浄道論』をパーリ語で執筆。
431年	求那跋摩、スリランカ、ジャワを経て宋に大乘戒を伝える。
435年	求那跋陀羅、スリランカを経て宋に至り大小乗諸経を訳す。
4～5世紀	世親、活躍。
538年	百済から日本に仏教伝来。
645年	玄奘、唐に帰国
695年	義浄、唐に帰国
7世紀後半	金剛頂経、南インドで基本形が成立。
718年	不空、ジャワで金剛智と出会う。
736年	インド僧菩提僊那、林邑僧仏哲、来日。
746年	不空、長安に再来、密教經典を多数訳出。不空⇒恵果⇒空海
752年	東大寺大仏、開眼供養。
790年頃	ボロブドゥールの建立始まる。仏伝・ジャータカ・華嚴経・金剛頂経に依拠。
794年	チベットでサムイェーの宗論。
806年	空海、日本に帰国。